「野中の清水」考

田尻嘉信

一

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む

（古今・雑上　読人不知　887）

古今集仮名序は、この歌にもとづいて、

あるは、松山の波をかけ、野中の清水を汲み、

と述べている。この部分は序の中でも、有名無実な六義の論などに較べると、別である。集中の歌例を証として、その実情を具体的に示したものである。とくに歌枕をあげて、比喩・序・懸詞など修辞の効用のほか、ある特定の印象・歓念の寄托される場合を説いている。いずれの場合も、万葉の侍宴従駕とは違う意味で、歌枕があらためて脚光をあびたことを明らかにするものである。

ここにいう「松山」は、いうまでもなく陸奥の「末の松山」（宮城県多賀城市）である。他の歌枕が、このように所在をほぼ認知される中で、「野中の清水」だけはいささか例外であった。その所在は、往時より一概に明らかとはいえなかったようである。のちの詮議をみても、推定の域を超えない。後続の歌数も限られるが、康和の堀河百首を前後して、次第に着目されたようである。歌合・家集の類などにあらわれ、やがて名所題専詠の最勝四天王院御障子歌では、諸国四十六名所の一つに選ばれたのである。

小稿では、歌書の所見必ずしも上々ではないが、この歌枕「野中の清水」の経緯について考察を試みてみたい。

二

石上ふるから小野の本柏もとの心は忘られなくに

（読人不知　886）

これは、冒頭にかかげた「野中の清水」の前に排列された一首である。やはり同じく「もとの心」の歌詞がある。この一首は明らかに序と

主想とから成り、上句が同音の繰返しで「もと（の心）」を導く序、下句が歌の本意となるものである。但し、序の解釈は八代集抄・余材抄、打聴・正義の諸注が区々で遠鏡は所見を欠くなど、定解を得ているとはいいがたい。眼目は「ふるから」の詞で、古幹（ふるから）の意である。これには「わが屋戸の穂蓼古幹」（万葉 2759）の先例がある。「石上ふる」の地名の「布留」（天理市布留）を古に転じ、「古」に老の意をもたせている。柏の大樹のことである。柏は落葉樹ながら春の若葉が自生するまで、枯葉を落さないとされる。したがって序は冬枯の布留野に、その柏の大樹が枯葉をつけて立っている有様をいったものである。序は歌意と直接の関連はないが、「古幹小野の本柏」の語感が、陰影となって「もとの心」に響いているようである。歌意は、「あの人のもとの心が忘れられない」ということである。余材抄が、

此歌恋にあらねば、唯もとより知れる人などを忘れぬ由也、是をもととして恋にいはんも勿論也。

というように、この場合は雑に部類されているので、広い意味での交情に触れた上での追憶をいうものである。

この歌をあげたのは、余材抄がこの雑歌排列の前後二首の「もとの心」の詞に着目して、「野中の清水」の所在を推定しているからである。同書は、

野中の清水と云を印南野と云るは僻事にて、布留野に有ける也。

として、両歌の排列から、

いそのかみふるから小野といふに次たれば、旁愚案其証あるに似たり

として、大和の布留野と断じている。立証の過程には貫之集の、やはり排列に注目して、

貫之集に石上ふる野の道の草分て清水汲むにはまたもかへらむ　此歌も恋歌の中に古に猶立返る心哉（をばイ）と云歌の上に有ば、もとみし人に又とひ返して逢はむ心也

と述べた一節がある。「古に猶立返る云々」は、

いにしへに猶立ち返る心かな恋しきことに物忘れせで（貫之集Ⅰ）

の一首のことである。そこで二首に共通する歌の心を、「もとみし人に又とひ返し逢はむ」とするものとし、延いて「野中の清水」に托される恋歌の心情とみたわけである。これは確かに撰集の詞書にもみられるところで、そのことに関して異見はない。

余材抄は、さらに論旨を所在の点に進めて、

昔みし古野の沢の忘水何今更に思ひ出らむ（寂超法師集）

いにしへのふるのの道を尋来て清水を猶も結びつるかな（堀河初度百首）

の二首を証歌にあげ、

これらに依らば布留といふは旅の義なれど、崇神天皇の御時始て布留社はいはれさせ給て、瑞垣結ひさしき所なれば、昔より古き心にいひなして来るより、古野といふ心になして又それを転じて古の野と詠めるか。

と述べている。『評釈』（金子元臣）はこれに就きつつも、「布留野の社云々は従ふべからず」といっている。

ともあれ、余材抄はこのように「野中の清水」を解して、その所在を推定したが、これですべてが氷解したというわけではない。新注の中でも、『評釈』（窪田空穂）の推す打聴のように、

もとは家居など有て、石井板井のわきいづらむ所の、荒れて野となりしを

といって、「野中の清水」を普通名詞とする例もある。その限り、この野は布留野・印南野（兵庫県加古川市）でなければならないこともない。余材抄の引用歌には「忘水」もあって、多少これと関連するが、「野中の清水」を固有名とするか、一般名とするかは、両書だけで定まる問題ではない。次に古来の歌書について、この点を触れてみたい。

三

古今集の雑歌には、卒直な生活の気分を巧まずに反映したような歌が多い。「石上ふるから小野の」以下の十余首は、いずれも読人不知の歌であって、それだけに名も埋れた人びとの感慨が、心も細く通ってくるような趣がある。

その中で「野中の清水」の歌は周辺の一連の歌と同じく、適切な比喩によって生かされたものの一つである。「野中の清水ぬるければ」は、昔と今との対比を水温によって示した表現である。本来、泉の水は清冽なのが珍重されるのである。「もとの心」は、その清冽さであり、いまは反対にせつかくの水も、「ぬるく」なっている。ぬるいのは、汚れて温かな水となってしまったことである。歌意は、「昔の心地よかった清水を知る人だけが、なつかしんで汲んでいることよ」というのである。良質の泉水は得がたいものであり、それが喪われたためになつかしさも一入なのである。

これを表面の意とすれば、「ぬるし」は落魄したわが身の暗喩であり、「もとの心」は世に迎えられたころの自分の心である。すでに侮り捨てられたものの、やはり故旧の情を忘れぬ人が訪ねてくれたり、優しい言葉をかけてくれるのを独り嬉しみ喜ぶとの歌意になる。次に続くところの、

いにしへの倭文の苧環いやしきもよきも盛りはありしものなり
今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを
世の中にふりぬるものは津の国の長柄の橋と我となりけり

の三首を読み合わせると、その感はいっそう如実に響いてくるようである。

「野中の清水」の歌は、八代集ではあと後撰集の次の二首だけであるが、それが大事なかなめとなるのである。

もとのめにかへりすむと聞きて男のもとにつかはしける
わが為はいとど浅くやなりぬらむ野中の清水深さまされば（恋三 不知 785）
あひすみける人心にもあらで別れにけるが、年月を経てもあひ見むと書きて侍りける文を見いでてつかはしける
いにしへの野中の清水みるからにさしぐむものは涙なりけり（恋四 不知 814）

両歌とも、古今集雑歌に拠っていることは明らかである。ことに後歌では上句がそのまま取られている。しかし、この場合は、一転して恋歌である。「野中の清水」は、わが身の今昔を比喩してのものではなく、一様に「もとの女」の意とした転化が巧妙である。前歌は女の歌である。作者は、漸く飽き方となった男のつれなさを恨む「いまの女」である。「いとど浅くや」と「深さまされば」との対照で、忘れられる女の嘆きがあらわされている。「浅く」と「深さ」は、勿論、水との縁である。後の歌は男の歌である。「彼文を此水になぞらへたるべし」（八代集抄）ということで、「野中の清水」は、これを寄越した「あいすみける人」を想ってのものである。「見るからにさしぐむ」の詞に、こみあげてくる思いの深さがある。「もとの女」をなつかしみ、いとしむ心である。「さしぐむ」は、「水汲む」の縁による表現である。

このほか、余材抄が、

野中の清水とささねども、かやうに詠むべき也。

として、例にあげている歌がある。次の二首である。

懸想し侍りける女のさらに返事し侍らざりければ　藤原実方

わがためは棚井の清水ぬるけれど猶かきやらむさてはすむやと（拾遺恋一670）

ふるく物いひ侍りける人に　清原元輔

草隠れかれにし水はぬるくとも結びし袖はいまもかわかず（同恋二760）

八代集抄は両歌について、次のように述べている。

かきやらんとは水の濁をかき流すに文書やるをそへたり、返事せずとも猶書やらん、若扨は心清く成もやせんと也。

昔物いひし人を草隠に乾き浅みし水に比して也、然共雑ゝ忘心也

この「棚井の清水」「草隠れかれにし水」の詞には、確かに「もとの女」の面影がある。それを促す因となっているのは、両歌の「ぬるけれど」「ぬるくとも」の詞である。これを「野中の清水」の歌枕に拠った歌と同視することには疑問があるが、「ぬるし」の詞を含むことによって、古歌の心を襲っていることは事実である。「ぬるし」の詞によって誘われる想念は、すでにかなり慣用化されていたといえるのである。

「ぬるし」の詞は、しかし、古く万葉集にもあり、たとえば、次の歌の例がある。

琴酒を　押垂小野ゆ　いづる水　ぬるくはいでず　寒水の　心もけやに　念ほゆる　音のすくなき　道に逢はぬかも　・・・・（巻十六3875）

これは長歌の前半部である。「押垂小野」は地名であろうが、所在は明らかでない。ここは、その野の湧水が温くはなく冷々としており、その清水が人に清々しい思いを抱かせるような音を立てるの意である。初五から「念ほゆる」まで七句が、「音」を言い出す序となっている。したがって、この歌では、野中の清水の湧き出る有様を敍べたもので、「ぬるし」の詞にも、何ら人事上の特定な発想はみえないのである。

次には、下って新古今集の例をあげてみる。

玉水を手に結びても心みむぬるくは石の中も頼まじ（恋五不知1366）

の一首がある。これは伊勢集に、初句「山水を」として出る歌である。

石の中から湧く清水がもっとも冷水であるとの前提に立っている。実際に冷くなければ、いわば見せかけだけでは、愛を頼みにはしないとの意である。水の冷暖を愛情の厚薄に比喩しているだけで、別に「もとの女」とは関係がない。伊勢のころにもこのような「ぬるし」の用法があったことになるが、この時期になると何も不思議ではない。単に「ぬるし」の詞だけでは、古歌の心を襲うものではあり得なかったということである。一方で「野中の清水」の歌枕が、ともかくも大方の承認するところとなって、その発想の内容も特定化し、歌枕に相即するものが求められたからである。それはすでに、「ぬるし」の詞にこだわる段階ではなかったともいえるのである。

四

さて、歌論書という点では、神中抄巻十の「野中の清水」に、

但、考三能因歌枕一云、野中のし水とはもとのめを云と云り。

とあり、以下、八代集抄・余材抄など諸注に引かれる能因歌枕が、「野中の清水」に触れた最初であったようである。しかし、現存の能因歌枕は、広狭二本ともこの記述を欠いている。また広本所収の「国々所々名」の条にも、「野中の清水」の名をみることはできない。

次には、綺語抄がある。巻上、坤儀部に「水」の項がある。但し、「野中の清水」はなく、「わすれみづ」の一項がある

忘水なり　野中などにしりもさだめぬ水をいふ。また細く流るる水をいふ。

歌にはたえだえなどよめり。

と書かれている。これは初学抄にも、

なかたゆる事には　ハナダノオビ　クメヂノハシ　ワスレミヅ　ホシアヒ

と載るものである。

はるばると野中にみゆる忘水絶間〳〵を嘆くころかな
（後拾遺・恋三734　大和宣旨）

住吉の浅沢小野の忘水たえだえならで逢ふ由もがな
（詞花、恋下、範綱　二三八・保延二年三月左京大夫家成歌合）

などの歌がある。ほかに「朝原〈大和〉の忘水」（康和二年四月廿八日宰相国信歌合）「ふるから小野の忘水」（天永元年四月廿九日右近衛中将師時歌合）の例がある。歌枕の歌とはなっているものの、「野中の清水」とは全く別趣のものである。「忘水」そのものは歌枕ではない。

ついで、奥儀鈔下に「古今歌百十六首」として、中に「野中の清水」をあげて、次のようにに述べている。

播磨の印南野にある也。昔はめでたき水にて有けるが、末にはわろくなりて人などのすさめぬを昔を聞伝たるものの、これにはめでたき水有とこそ聞けとて尋てみるに、あさましくきたなげに成てありけれども、これはめでたかりける水なり。いかでか飲まで過ぎむとて飲めりけることをよめるとぞ申すめる。それよりもとを知れる事に言伝たる也。いまはかたも侍らぬにや、是は人の語りし事他。見

たる所もなければ頼みがたし。

伝聞によったことを明らかにし、保証しがたいことを告白しているが、「野中の清水」の所在が触れられたのは、現存資料ではこれが最初である。清輔は、すでに跡形もないかと想像しているが、西行・俊成卿女の詞書には実地にみたことが記されている。次がそれである。

物へまかるとて野中の清水をみて　（続後撰・羇旅1314　西行）

老いののち都を住み憂かれて、野中の清水を過ぐとて

（続古今・雑下1788　俊成女）

西行・俊成女の境遇からは、前者の書写山詣（姫路市）、後者の越部（兵庫県新宮町）隠棲など多分に真実味のあるものである。おそらく「印南野」であろうが、具体的にどこで、どのような形状なのかとなると、やはり全く不明である。また童蒙抄第三、地部の「水」の項には、古今歌をあげて、

野中の清水、河内国にあり、又播磨の国にも有云々。水とは妙清水

とぞ本文には書たる。

と述べるところがある。これでは「河内国」が主で、「播磨の国」は従ということになる。いずれも、証歌の類の記載はないので、信憑性は二の次ということになる。

さて奥儀鈔は、明らかに伝聞で、遠い過去の伝承を記録にとどめた体となっている。「めでたき水」が童蒙抄の「妙清水」である。また「わろき」が、古今の「ぬるき」にあたるわけである。しかし、名水伝説であって、その関心が「いかでか飲まで過ぎむ」の箇所に反映している。人事上の暗喩などには触れず、水に終始している点が物足らない。

同じ清輔ながら後年の初学抄は、所名の雑に範例化して、

播磨　野中の清水　ムカシヲオモヒイヅルニ

と載っている。寸言ながら趣のあることである。これは、恋歌の連想を伴う「もとの女」といった彼我対照を固定する比喩的な捉え方とは、随分相異している。構成美をめざす詠歌の端緒として、発想の基本が予見されたことで、「清水」との関連で四季歌的な素材の開眼を示唆するものといえる。「野中の清水」が、歌枕としては、当然、実地の景にもとづいて客観される必要があったわけで、古今歌への再帰をこめて、漸く新たな視野を生じたといえるのである。

その点、袖中抄は、所在を「播磨の稲見野」とし、古今以来の歌史に徴して考証的であるが、ほとんど過去の歌解に尽きている。

今案云、その故なくもとのめを野中の清水と云べきにあらず、あらましごとに野中の清水はぬるくとも、もとその水を知たらん人の汲まんやうに、昔心を尽くしいみじく覚えし人の衰へたらんをも、もとの有様知りたれば、猶結ぶ由をよめりけるを本として、もとの妻をば野中の清水と云ならはしたるにこそ。

と述べている。その筋道は確かに立っているが、旧態を明らかにするにとどまって、歌枕としての視野を閉ざしている趣がある。

顕昭は、さらに「大原の朧の清水」（京都市左京区大原）を付載して、

又古今に、

大原や朧の清水よにすまばまたもあひ見むおもがはりすな

此歌を本にて野中の清水のやうに、朧の清水と云こともとあひた

らんなからひなどに詠むべし

と述べている。この「大原や」の一首は古今集にみえず、「野中の清水」と同然の扱いを求めていることは、根拠も明らかでなく奇矯に聞える。

然者朧の清水は大原にあれど、もとのめにもよせてよむべきにこそ、野中の清水はいなみ野にあれどさやうによみたちぬれば、水の題などにはいともよまず

とまで述べるのである。「野中の清水」「朧の清水」を一視同仁して、「もとの女」に執するあたりは、不思議の感が強い。所在が明らかに異り、歌史の経緯もまた同然とはいえないはずの両歌枕が、このような扱いを受けることは甚だ不審である。また「清水」の語感からすれば、当然、夏涼の水の題などの連想も起こってくるはずで、それを禁じるのは守旧の難をまぬかれない。学匠顕昭の面目は、むしろこのあたりにあるのかも知れないが、さりとて時の勢いについて、無関心でありすぎるようである。

五

そこで次に、この時期の「野中の清水」がどのように詠まれたか、あげてみたい。

歌合には著名でないため例がすくなく、時代も上来の歌論書よりかなり以前のものであるが、注目すべき次の諸歌がある。

岩代の野中の清水結べども恋をば消たぬものにぞありける
（元永元年六月廿九日右兵衛督実行歌合・経兼）

御狩する野中の清水そこすみて鳥かふ鷹の影ぞうつれる
（元永元年十月十三日内大臣忠通歌合・兼昌）

月影も野中の水に宿りけり萱がまろぶしわれひとりかは
（某年経盛歌合・親宗）

経兼は、「寄泉恋」三番六首の中のものである。能因歌枕は紀伊の「いは井」を載せているが、「岩代の野中の清水」は歌枕とすれば不審である。固有名とすべきではないかも知れない。これは後拾遺の和泉式部の歌、

泪川同じ身よりは流るれど恋をば消たぬものにぞありける（恋四802）

の下句をとったものである。袋草子下巻の古今歌合難に、この歌合の判者顕季の判難が、次のように載っている。

岩代の野中の清水心得ず、結松などこそ人知り来れ、野中の清水は稲火野にこそありと聞ゆれ、証歌やあらむといへど不出ば負ぬ

「野中の清水」の所在が、まず問われている。歌枕にとっては、やはりそれが一義であったからである。なおこの「寄泉恋」で、俊頼の「朧の清水」が一首ある。

わが恋は朧の清水岩越えてせきやるかたもなくて暮らしつ

というものである。経兼・俊頼両歌に「もとの女」の翳は全くない。

次の兼昌は「鷹狩」六番十二首の中の一つで、十五番左持となったものである。鷹狩の歌合歌題は、長暦二年晩冬権大納言師房歌合を先例と

次に家集にみる「野中の清水」は、次のような歌群でほとんどすべてである。

春深くなりゆくままにあけにけり野中の清水草隠れして（出観集108）
玉鉾の道だに見えぬ夏草に野中の清水いづくなるらむ（教長集889）
昔見し野中の清水かはらねばわが影をもや思ひいづらむ（山家集1096）
冬の夜は野中の清水こほれども忘れず宿る月のかげかな（隆信集270）
夏草はしげりもゆくかいにしへの野中の清水かげくもるなり（順徳院御集489）

古詞を取った歌もあり、懐旧の情をこめた歌もある。しかし、「野中の清水」に固有とされた恋歌的な発想は消えて、歌枕を本に四季歌的な景への傾きが顕著となっている。顕昭流の守旧の道とは別に、「野中の清水」は、著実に一歩を進めようとしていたことがわかるのである。

最勝四天王院御障子和歌は、それのもっとも決定的な姿を示したものといえる。襖絵に画かれた名所は「春日野」以下、諸国の四十六ケ所で、いずれも古来名のあるところであった。中で比較して新しく著われたのは、「水無瀬川」である。歌詞としての水無瀬川は古いが、固有の地名は後鳥羽院の水無瀬殿で高名となったものである。これは新古今歌壇にはきわめて由緒あるところであり、竟宴後の歌壇の掉尾を飾るこの催には、不可欠といっていいものであった。その点、「野中の清水」は、これまで名所絵に画かれたことは、皆無であったとみていい。二、三の例外はあっても、多くは伝聞によってわずかにその所在が推定され、歌詞としては「もとの女」との意で守旧され、ごく限られた歌が散

するが、番数の多い点でこの歌合は特別のものである。堀河初度百首の冬十首に鷹狩の歌題があるが、この歌合でも兼昌の「鳥かふ鷹」を含めて、「そらとる鷹」「真白斑の手馴れの鷹」など、鷹狩用語に新鮮味がある。また、この歌合全体で十九ケ所の名所が副題とされたことも出色である。兼昌の歌は堀河初度百首、匡房の、

御狩する野中の木居の繁ければ空とぶ鷹の手がへりもせず

の一首に倣ったのであろう。「野中の木居」は直接「清水」に結ぶものではないが、匡房の上句を襲っての「野中の清水」であった。交野は三首あり、鷹狩名所としてさすがである。較べて「野中の清水」は全くの新顔であって、兼昌の歌ではこれまでの常套の連想を打破するほどに、雄壮斬新な気分があり、珍重されていいものである。

次の親宗の歌は、「月影」を点じて、「野中の清水」に纏わる主情性を抑え、客観詠としての歌枕起用に新たな視野を示した点が評価される。清水に月影は当然の寄せであり、歌材とならなかったのが不思議である。それほどに「野中の清水」は、古来の恋歌的連想に制約されてきたわけである。

こうしてみると、この歌合歌三首が「野中の清水」にもたらした意味は決して軽くはなかった。偶発的なことで終るべきものではなかったのである。従来の詠歌とは違って、明らかに四季歌による新領域の開けてくる端緒が示されたことであった。それには当然歌材の充当配慮も必要であり、興趣もまたそこに増幅されるはずであった。「野中の清水」の帰趨を卜する上で甚だ興味ある事実であったといえるのである。

見されたにとどまるのである。勿論、大嘗会屏風などとの所縁は全くなく、「野中の清水」が遇去に具体的な構図を障屏画に試みられたはずはないのである。

ここに選ばれたことが不思議なくらいである。「野中の清水」の詞からまず誘われる爽快な景趣の連想が、おそらく大きな理由となったのであろう。歌合の歌にみられたように「野中の清水」は、すでに人事の固定した想念の埒外に一歩出はじめていた。歌枕本来の実景への関心から、叙景歌的な発想が意図されていたわけである。加えて新古今歌壇の好尚という問題もある。恋歌の連想を素地とする古詞をもとに、四季歌的な景趣への詠替えによって、新情を尽くすことが詠歌の芸術的意図と目的とを充たしたのである。「野中の清水」はそういう意図のもとに、歌壇に、何か一種の浪漫をもって迎えられたのであろう。播磨三名所の一つとして、「高砂」「飾磨市」とともに撰題されたのである。

その名所詠は、次の諸歌である。

いにしへの野中の清水尋ぬれば笹分くる袖に露ぞ置きそふ（後鳥羽院）

心あれや野中の清水かげ澄みて昔に宿る夏の夜の月（慈円）

年へても思ひいづやと印南野のふるき清水に昔をぞ問ふ（通光）

草深き野中の清水たえだえになびく末葉の風ぞ待たるる（俊成女）

ささ深き野中の清水風すぎてささに昔の心をぞ汲む（有家）

玉鉾の道の夏草末とほみ野中の清水しばし影みむ（定家）

昔問ふ野中の清水立ちかへりもとの心に夏ぞ汲まれむ（家隆）

いにしへの野中ふるみちこと問へば清水ながるるよのささ原（雅経）

印南野や野中の清水むすぶ手にたまゆら涼し笹のかり庵（具親）

契りあれば野中の清水むすびあげてもと見し影をまた宿すかな（秀能）

「野中の清水」に配された歌材は、笹・月・葉・風・庵の類いである。その選択は多様であり、精確であった。それに伴う修辞が、主に縁語の構成となって随所に示されている。さすがに古歌が、主情性を柱としていただけに、その名残はこれらの歌にも多少はみられる。勿論、恋に躊躇するような狭いものではない。四季の風物への情感にもとづく優婉微妙な気分となっているものである。一首の余情、あるいは陰翳となって、「野中の清水」の映像をゆたかにつくりあげているのである。本来の「野中の清水」の単純な景を、一幅の名所絵との対応で、幾重にも情趣化して深い味わいとしたのは、やはり出詠者の力量であろう。「野中の清水」の新領域が画されたのである。

六

その後の建保内裏名所百首では、「野中の清水」は撰題されなかった。理由は明らかでないが、その所在が確実性を欠いた点が想像される。純然たる名所に立脚しての専詠百首ともなれば、この瑕瑾は軽くはないからである。奥儀鈔・童蒙抄の所説の程度で、信憑できる実在性は得られない。またこの時点では、俊成女の場合はともかく、西行の場合には、

例となるものである。なお狂言「野中の清水」（「鬼清水」「清水」）も、伝承に基くものであろうが、歌枕についての所見はない。

探訪の事実が伝播しているはずであったとも思われるが、やはり漠としていたのであろう。八雲御抄も、名所部の「水」の項に旧来の所説をかかげるだけで、新味はない。

のなかのしみづ　いなみのにあり　又河内に有　以二播磨一為レ本

と注記している。せめていえば末尾の「以二播磨一為レ本」が、認識の基本を示したことになろうか。最勝四天王院の場合にも、「印南野」の歌詞は二首に出ており、通説となってはいたのであろう。八雲御抄は、それを確認した程度に終っている。

建保名所に撰題されなかったためか、十三代集でも「野中の清水」は振るわず、十三首にとどまった。八首は新古今歌人であり、中世の詠歌は五首（続拾遺197 信実　新後撰614 道宝　続千風雅1965 忠秀　新続古惟方1775 頓阿　2047）と寥々たるもので、詞書に所在を触れた例はないが、恋歌的発想は後を絶っている。

このように「野中の清水」は、終始その所在について疑いがもたれてきた。余材抄の大和説、さらに打聴の普通名詞説まで加えると、四分されることになり、これは他の名所に較べて、もっとも異るところである。夫木抄は巻二六雑部八の「水」に、最勝四天王院の有家・具親と、続後撰の西行の三首をあげ、播磨と注している。歌枕名寄・松葉名所和歌集も同様、印南野を採っている。しかし、地志播磨鑑にはなく、また河内名所鑑・和州旧跡幽考など諸志にも該当項目をみいだすことはできなかった。結局、古今集序にとりあげられたことは、貫之の個性的著眼にとどまり、「野中の清水」は未詳のままに、近代の諸注に受け継がれているわけである。はじめにあげた両先考による『評釈』は、その代表